

西村由美子編著『アメリカ医療の悩み：どこに問題があるのか』
(サイマル出版会)

川 渕 孝 一

クリントン大統領は1993年9月22日夜（日本時間23日午前）、米上下両院合同会議での演説において、1930年代のF. ルーズベルト大統領による社会保障制度の導入以来の、歴史的な社会制度改革と言われる医療保障（ヘルスケア）制度の改革案を発表した。米国史上初の国民皆保険と、財政赤字削減のための医療費コスト抑制が二大目標で、①医療保障（国民皆保険）、②簡素化、③経費節減、④選択の自由、⑤医療の質の向上、⑥責任、の6つの原則を打ち出し、94年末までの立法化を呼びかけ、先進国の中では最も遅れている医療保険制度の改革が「最優先課題」と強調した。

しかし、1994年10月、クリントン大統領の唱えた医療制度改革は失敗に終わった。米国議会は会期内に医療制度改革法案を成立させることを断念したからである。

本書を読むと、①クリントンの医療制度改革がどうして失敗したのか、②問題点の所在は明らかになったのに、何故、米国で医療制度改革が困難なのかが非常によく分かる。

本書によれば、「医療改革が成功しなかったのは、クリントン大統領の政治的な力量と経験の不足に起因する見通しの甘さと、戦略的な失敗とによる」としている。

具体的には、まず第一に、「クリントン政権が国政経験に欠けていたこと」を挙げている。つ

まり、米国の議会における政策策定過程に十分に精通したスタッフがクリントン陣営にいなかったと言うのである。

第二に、「基本的な戦略にもいくつかの重大な誤り」を犯したことである。ここで言う重大な誤りとは、①「ファースト・レディ」のヒラリーの登用によって本音の議論が封じられた、②医療界を取り巻く数多くの利害関係者への十分な働きかけがなかった、③クリントン陣営に十分な妥協の姿勢が見られなかった、さらには、④メディア対策が十分でなかったことなどの一連の失敗を言う。

そして第三に、クリントン法案そのものが内容的に難解で、誰も全体像が把握できなかったことを挙げている。その結果、「政府統制の強い医療改革になるのではないか」という恐れを国民に植えつけ、国民のクリントン離れ現象が生まれたと言うのである。

こうした簡潔・明瞭な指摘が、本書のプロローグの中でなされているので、読者は勞せずしてアメリカの医療制度が有する矛盾を理解することができる。つまり、序章の部分を読めば米国で医療制度改革を断行することがいかに難しいかを読者はある程度把握することができるのである。

実際、本書は、3部構成からなるが、これらはすべてプロローグで指摘された内容をより詳

しく説明する構造となっている。具体的には、まず第I部「米国の医療制度—しくみと問題点」は4章から成り、①米国の医療界がいかに巨大な市場になっているか、②国民皆保険が達成されているわが国と異なり、米国には、いかに多種多様な保険者・被保険者が存在するか、③米国の高齢者医療・介護政策がいかに、貧弱なものであるか、④米国の医療界は、コストシフティングによってこれまで無保険者の医療費負担を解決してきたことなどが述べられている。

次に、第II部「制度改革—そのダイナミズム」は、3章から成り、①米国議会における立法過程がいかに複雑怪奇で専門的な運営能力を要するか、②メディアを巻き込んだロビイストの活動がいかに多岐にわたり無視できないものであるか、③連邦制を採用している米国では、わが国と異なり連邦政府（国）と州政府の関係が、決して中央集権的ではなく、州の自治権が極めて強いことが述べられている。

そして第III部「新しい医療制度—どう作るか」は3章から成り、①クリントン法案が他の対案と比べて、いかに膨大で、難解なものだったか、②本書の編者の一人でもあるアラン・エントーベン氏が提唱する「マネージド・コンペティション」という概念と照らし合わせて、医療制度改革法案（クリントン法案を含む）がいかなる得失を有していたか、③米国の医療制度改革には保険へのアクセスの拡大、給付内容の拡大、そして多様性への対応といった指標を同時に解決する策が求められるが、その実現は難しいことなどが指摘されている。

以上、本書の概要について述べたが、このほか、本書を読めば、とかく分かりにくいとされる米国の医療制度の全貌も理解できるので、米国の医療制度を網羅的に知りたいという読者に

は必読の書と言える。本書は、米国在住の医療専門家によって書かれたという点で、米国の医療制度を断片的に紹介したこれまでの書物とは趣を異にするわけである。まさに、本書は、スタンフォード大学のアジア太平洋研究センターで、1990年1月に発足した医療政策比較研究プロジェクトの活動成果の産物と言えよう。

しかし、本書に対して、一言クレームをつけるならば、確かに本書を読むことによって米国で医療制度改革を実行することがいかに困難かはよく分かったが、こうした問題点を解決するための具体的な処方せんが示されていない。なるほど、第III部の中で、アラン・エントーベン氏が唱える「マネージド・コンペティション」の考え方が示されているが、①この考え方が他の対案に比べていかに優れているのか、②これをどのようにして制度化するのか、はっきり見えてこない。

願わくば、多くの困難を克服するための将来に向けた「処方せん」が示されていれば、もう少し実践的な書になるのではないだろうか。わが国でもヘルスケア・リフォーム（医療保険改革）という言葉が最近いろいろな場で使われるようになったが、その力点は問題点を羅列する段階から、これをいかに解決するかという具体的な「処方せん」を提示する段階に移っている。確かに本書は「急激な高齢社会が進んでいる日本にとっても、有効な示唆に富んでいる」部分があったが、大胆な処方せんの提示がなかったことは、非常に残念である。

しかしながら、本書は最近の厚生行政のあり方を再検討し、今後わが国が進むべき方向を見極める上で、極めて有用な書であることは疑いのない所である。ぜひ一読することを勧めるものである。

西村由美子編著『アメリカ医療の悩み：どこに問題があるのか』

(かわぶち・こういち

国立医療・病院管理研究所主任研究官)